

# 誇り・味方・居場所 —私の社会保障論



## 第8回

### 真の福祉は、想像力と度胸から

プロの和太鼓集団「瑞宝太鼓」<sup>ずいほうだいこ</sup>が、東北大震災被災地の海辺で鎮魂の演奏を始めた時のことです。吸いよせられた人の輪の最前列にいた女性が、赤ちゃんの遺影を取り出しました。そして写真に語りかけ、一緒に演奏に聴きいりました。

瑞宝太鼓がしばしば演奏に訪れる少年院からの手紙には、こうありました。

「自分をより大きく見せようと見栄を張る、そんな心をぶっ壊してくれました。心を洗ってくれているようでした。絶対に自分を変えます」

演奏する団員はいずれも重い知的なハンディを負っています。何が人の心を揺さぶるのか、源をたどると「愛する人と、ふつうの場所で、ふつうの暮らしを」というノーマライゼーション思想を掲げる、南高愛隣会・コロニー雲仙に行き着きました。

理事長の田島良昭さんは、かつて心身障害者対策基本法



「瑞宝（ずいほう）太鼓」のスターたちです。知的なハンディを負った人々の職業訓練をする長崎能力開発センターのクラブ活動として1987年に始まりました。

の制定に奔走しました。施設をつくれれば幸せにできると信じてのことでした。ところが施設を訪ねると、ご本人たちはションボリしていました。

訳を突き止めようと、1978年自ら施設をつくり、利用者と同じ広さの厨房控室に親子

3人で住み込みました。そして知ったのは、「施設には普通の生活がない」ことでした。

自立訓練棟という、今でいうグループホームをつくり、施設の外で暮らせるようにしてゆきました。当時は法律違反でした。行政はとがめましたが、「不幸になった人がいるのかどうか裁判で争おう」と撃退し、2007年までに施設をカラにしてしまいました。

日本の最先端をいく施設解体です。

能力開発センターで、町の中で働ける力をつけました。太鼓もその中で生まれました。ところが田島さんは、再び衝撃を受けました。グループホームと仕事場の往復だけの人は、変に落ち着いたおじさんお婆さんになってしまっている。対照的に愛する人がいる人、結婚している人はときめいていました。そこで、結婚推進事業「ぶ〜け」をつくり、グループホームの解体を始めました。アパートで暮らすカップルが増えてゆきました。



写真の笑顔の秘密を解く鍵は「愛する人との暮らし」「仕事への自信」「安定した収入」「地域の人役にたっているという誇り」にあるようです。友樹ちゃんを囲んだ写真右の友広さんは、瑞宝太鼓の団長、友子さんは給食センターで働いています。

てんかん発作と知的なハンディを負った青年が理事長をつとめるNPOふれあいネットワーク・ピアは、ケアホームなど公的福祉事業の認可を受けるほどに成長しました。

瑞宝太鼓が人々を魅了するのは、バルセロナのパラリンピック閉会式に招かれるという演奏技術の素晴らしさだけではありませんでした。メンバーが恋人や家族をもち、仕事に誇りをもって輝いているからでした。

昔作られた法律の枠を超えたところにこそ、真の福祉があるようです。それを実現するために必要なのは、本人の願いへの想像力と、改革する度胸だと私には思えます。

#### ノーマライゼーション

どんなに障害が重くても、人は「ふつうの暮らし」をする「権利」をもち、社会はそれを実現する「責任」があるという思想。第二次世界大戦中、反ナチ運動で捕らえられ強制収容所を体験したN・E・バンクミケルセンが、施設と収容所に共通する問題に気づき、1959年、デンマークの法律に盛り込んだ。

編集部註：本連載は、小社から刊行している『誇り・味方・居場所—私の社会保障論』（2016年3月10日発行）から選択して掲載しております。初出は毎日新聞朝刊に月1回掲載された「私の社会保障論」（2011年5月～2013年9月）です。したがって、記事中の人物・名称・活動・事物などで現在は亡くなっている方や変化している場合もありますのでご了解のほどお願い致します。

#### <その後>

「施設を閉じ、ハンディが重くても愛する人と故郷の町で」を実現したバイオニア、田島良昭さん。次に取り組んだのは、繰り返し罪を犯してしまう障害者の支援でした。2011年には検察改革の一環で最高検参与に就任。ことし7月10日には「刑のゆくえ～生きる力の弱い人と刑事司法」を開きました。

林真琴さん（検事総長）、荒中さん（日本弁護士連合会会長）と一緒に登壇する前代未聞のシンポジウムでした。

そして、8月2日、骨髄がん腫症のため亡くなりました。76歳でした。



福之さんは給食センターの統括係長、ヤス子さんは名人のワザをもつソーメンの品質検査の係長。大志ちゃんを抱いているのが、田島さんです。

長崎新聞から、死を悼む2人の言葉を引用します。



林眞琴検事総長は「検事人生の中でもっとも大切な師だった」と表現した。田島氏は刑務所や少年院に障害者が数多くいることを知り「矯正施設の職員の皆さんが、必死で支えていただいていることに気づけなかった。本来、福祉のわれわれが主体でなければならなかったことだった。お詫びしたい」と発言していた。

こうした発言を「凄いところ。常に自分の課題として捉えアプローチしてくる」と讚えた。

荒中・日弁連会長は、病を押して登壇したことに触れ、「残っていた力を全部吐き出して逝かれた。

とんでもない、素晴らしい人。利用者を家族のように一人一人分かって向き合ってきた。障害のある人から『生まれてきてよかった』と言ってもらえるように魂をこめて制度をつくり、修正し、運用することをわれわれに範を示して亡くなられた。

宿題は重い」と遺志を受け止めている。



\*単行本

<http://lifesupport-co.com/order33/books.html>

\*電子版

<http://www.shinanobook.com/genre/book/3443>

『誇り・味方・居場所-私の社会保障論』

大熊由紀子著

B6判変型 定価 1,600円+税